

修士論文 (要旨)
2009年1月

「英語」と「英会話」の使い分けによって構築される社会的認識のディスコース分析

指導 畑山浩昭 教授

国際学研究科
言語教育専攻
207J4010
代田雅哉

目次

序章	はじめに	1
0.1	問題の所在と研究の意義	1
0.2	主な目的	4
0.3	研究のアプローチと制限	4
第1章	先行研究(文献研究)	6
1.1	先行研究の考え方	6
1.2	「英語」について	6
1.2.1	教育	6
1.2.2	国家・民族(アイデンティティの確立)	7
1.2.3	政治・経済	7
1.3	「英会話」について	8
1.3.1	稽古事としての「英会話」	8
1.3.2	流行としての「英会話」	8
1.3.3	「英語」の一部としての「英会話」	9
1.4	「英語」「英会話」共通	9
1.5	まとめ	9
第2章	方法論	12
2.1	ディスコース分析	14
第3章	分析の対象と実際	16
3.1	テキスト分析	16
3.2	レトリック分析	25
3.3	考察のための整理	28
3.3.1	特徴の抽出	28
第4章	調査結果への議論と解釈	30
4.1	英会話の「楽しさ」と「親しみ」	30
4.2	英語の「正統性」と批判	31
4.3	「道具」としての英語と英会話	31
第5章	結論と英語教育への示唆	32
5.1	結論	32
5.2	浮き彫りになった問題点	33
5.2.1	実体のないコミュニケーションを起こす「英会話」	33
5.2.2	「英語」によるプレッシャー	34
5.2.3	「英語」の実利主義への敗北	34
5.3	英語教育への示唆	35
5.4	今後の課題	36
参考文献		
謝辞		
資料		

要 旨

日本では English を指す語として「英語」と「英会話」がある。なぜ言語として元来一つの体系であるはずの English が日本語では二つに分けて、使用されているのだろうか。2つの語で区別されるとき、人は何をそこに期待するのだろうか。「英語」と「英会話」に分けて社会的に認識されていることが、英語教育にどのような影響を与えているのだろうか。現代社会における「英語」と「英会話」という用語の使用について分析し、「英語」と「英会話」が使い分けされる背後にある動機や意図を探った上で、英語についてのより客観的な認識を試みると共に、英語教育への示唆を示したい。

先行研究として「英語」と「英会話」の社会的な認識を探る上で、これまで日本の中で「英語」「英会話」がどのようなコンテキストの中で語られてきたかを調べるのが有用であると考えられる。このテーマに関連すると思われるこれまでの主な議論を整理するために、英語教育の代表的な研究者の著作、また、新聞や雑誌など広く人々に読まれる媒体をレビューすべき文献とした。これらを批評的によむことで、日本人が「英語」というものをどのように考え、認識してきたのかを把握すると同時に、現代日本社会において「英語」「英会話」がどのように語られてきたかという変遷を知ることができる。

分析の方法としてディスコース研究を用いる。ディスコース研究は言語学、社会学、文化人類学など、さまざまな分野にまたがった学際研究である。この論文で明らかにしようとしているテーマが学際的な問題であるので、ディスコース研究という手法が適切であると考えられる。しかし、ディスコース研究を用いる全ての分野からのアプローチを行うことは難しいため、この論文では、対象としての言語使用を客観的に把握、分析するという意味において、テキスト分析を利用し、対象の奥に潜む意図や動機を明らかにするという目的で、レトリック分析を採用する。

分析の対象とするのは、①英会話学校のホームページ、②「英語」「英会話」のいずれかを題名に含む本の題名とした。「英会話」を売り物とする英会話学校は「英会話」の語りとして重要である。また本の題名は「英語」「英会話」という語を特徴的に使っているのではないかと考えられる。新聞・雑誌及びその他の資料は、社会に広く読まれているものであるから、それらの中でどのように語られているかは重要である。取得したデータの中から特徴を抽出し、先行研究との関係を見極めることによって、考察すべき項目を整理する。

調査結果を分析、整理した上で、先行研究における主な議論や方法論における利点、欠点等を批判的に考慮しながら、「英語」と「英会話」の使い分けによって構築される社会的認識について詳しく言及することを試みる。

最後に、本研究によって明らかになった問題や議論を基盤にして、今後行うべき研究の提示や、取り組むべき課題について述べる。特に、英語教育の基本的な方針や、英語教育に携わる者として備えておくべき教養等については、積極的な提言を行いたい。

参考文献

- 大石俊一(1990)『「英語」イデオロギーを問う ――― 西欧精神との格闘 ―――』開文社出版
- 大村喜吉[ほか]編(1980)『英語教育理論・実践・論争史』東京法令出版.
- 川澄哲夫編(1978)『英語教育論争史』大修館書店.
- 菅野盾樹(2007)『レトリック論を学ぶ人のために』世界思想社.
- 鈴木孝夫(1999)『日本人はなぜ英語ができないか』岩波書店.
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店.
- 鈴木智志(2007)『会話分析・ディスコース分析 ことばの織りなす世界を読み解く』新曜社.
- ダグラス・ラミス 著/斎藤靖子 ほか訳(1976)『イデオロギーとしての英会話』晶文社.
- 田中克彦(1981)『ことばと国家』岩波書店.
- 津田幸男(2003)『英語支配とは何か ――― 私の国際言語政策論』明石書店.
- 長谷川恵洋(1997)『英会話と英語教育：阪南大学叢書 49』晃洋書房.
- ハインリヒ F. プレット著/永谷益朗訳(2000)『レトリックとテキスト分析：レトリックの視点からのテキスト分析入門』同学社.
- 橋内武(1999)『ディスコース：談話の織りなす世界』くろしお出版.
- 本名信行(2007)「英語の多文化化と異文化間リテラシー ―異変種間相互理解不全問題の克服を目指して―」『明海大学大学院応用言語学研究科紀要 応用言語学研究 No. 9』.
- 平泉渉・渡部昇一(1975)『英語教育大論争』文芸春秋.
- マイケル・スタッブズ著/南出康世・内田聖二訳(1989)『談話分析：自然言語の社会言語学的分析』研究社出版.
- 泉子・K・メイナード(1997)『談話分析の可能性：理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版.
- 泉子・K・メイナード(2004)『談話言語学 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版.
- 脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子編著(2002)『レトリック小事典』同学社.
- J.V. ネウストプニー・宮崎里司(2002)『言語研究の方法 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』くろしお出版.
- Benjamins Publishing.
- Cooper, Martha. (1989) ANALYSING PUBLIC DISCOURSE. Waveland Press.
- Herrick, James A. (1997) The History and Theory of Rhetoric : An Introduction. Allyn&Bacon
- Johnstone, Barbara. (2002) Discourse Analysis. Blackwell Publishers.
- Schiffrin, Deborah. (1994) APPROACHES TO DISCOURSE. Blackwell Publishers.
- Smith, L., ed. (1983) *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.
- Renkema, Jan. (1993) DISCOURSE STUDIES: An Introductory Textbook. Joh